

令和元年6月17日現在

機関番号：34418

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02338

研究課題名(和文)19世紀アメリカ禁酒小説/運動におけるジェンダーギャップの研究

研究課題名(英文)A Study of Gender Gaps in the 19th Century American Temperance Narrative/Movement

研究代表者

森岡 裕一 (Morioka, Yuichi)

関西外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：20135635

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：19世紀アメリカ禁酒物語のテキストや関連資料の調査・収集を継続的に行い、Mary Chellis, T.S.Arthurら主要禁酒物語作家はもとより、Alice Carey, THE ADOPTED DAUGHTER(1859), Nellie Graham, THE GLASS OF WINE(1866)など、長らく入手困難な作品を調査できたことで、19世紀全般の禁酒物語理解が深まった。

それら入手した資料の分析を通して、男性禁酒物語作家の作品における「男性性」の扱いを飲酒/禁酒という相反する観点から考察し、ジェンダーギャップのメカニズムを解明、くわえて女流作家の作品との比較考察も行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

禁酒運動の重要部分をになった禁酒物語については、そもそも認知度が低く、理由は膨大なテキストが入手困難な状況にあることが大きい。そこで継続的にテキスト入手を行い、相当数のテキストを集めることができたことは、この分野の研究進展に大いに貢献するものと自負している。

入手した資料の分析を通じて、男性作家と女性作家のジェンダー観、とりわけ離婚に関する考え方の違いに着目し、男性性、女性性の主題に見られるジェンダーギャップの解明を行ったが、女性参政権運動など、19世紀アメリカの社会運動の思想史的見直しにつながるものである。

研究成果の概要(英文)：With continued efforts to gather temperance-related materials, considerable number of texts have been gathered, not just by such major temperance writers as T.S. Arthur and Mary Chellis, but also by minor but important writers like Alice Carey and Nellie Graham. Based upon the materials acquired, a theme of "manliness" in the narratives by male writers has been studied, with emphasis on the different approach to the theme by female writers.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：禁酒運動 禁酒物語 ジェンダー 家庭小説

1. 研究開始当初の背景

本研究担当者は、平成8年12月、日本アメリカ文学会関西支部第40回支部大会のフォーラムにおいて、「酔いどれアメリカ文学」というシンポジウムを企画、司会し好評を得た。その後、同メンバー計5名で共同研究を組織し、2年間にわたる研究成果を平成10年、研究成果公開促進費の支援を得て、共著『酔いどれアメリカ文学』(英宝社)として出版することができた。その後、科学研究費補助金の支援を得て個人研究を継続し、数々の研究発表を行った後、それまでの成果をまとめ、平成17年に、単著『飲酒/禁酒の物語学 アメリカ文学とアルコール』(大阪大学出版会)として出版、また、同時期に出した、この分野の代表的作家T.S.アーサー『酒場での十夜』の翻訳・解説とともに、アメリカ文学と酒との関わりを包括的に検討する第一段階の締めくくりをすることができた。

その後、四度にわたる科研費の支援を受け、並行して進めている家庭小説の研究と関連づけながら禁酒物語の研究を深め、19世紀感傷主義の視点から両ジャンルを統合する道筋をつけることができた。具体的には、禁酒物語における共依存モチーフを探った研究や、ストウの『アングル・トム小屋』を禁酒物語として読む試みなど、従来になかった19世紀アメリカ文学へのアプローチを提起できた。本研究は、上記研究成果を基に、ジェンダーの主題に特化した形で、禁酒物語の構造をさらに考究したものである。

全般にこの分野は未開拓の領域である。先行研究としては、ジョン・クローリー、*The White Logic* (1994)やニコラス・ウオーナー、*Spirits of America* (1997)、デビッド・レノルズらが編集した*The Serpent in the Cup* (1997)など、この分野の優れた研究は少数ながらあるが、禁酒物語に特化した研究はいまだない。近年のエレン・パーソンズ、*Manhood Lost* (2003)は重要だが、社会学の立場からの研究で文学テキストはほとんど扱われず、マッツ・ジョス、*Writing Under Influence* (2010)も、ヘミングウェイへの言及はあるものの、主としてアメリカ現代詩人と酒の関わりに関する記述に重点があり、19世紀禁酒物語は扱われていない。

禁酒小説の隣接ジャンルである19世紀アメリカ家庭小説については、作家論、作品論ともに研究が進んでいる。アン・ダグラス、*The Feminization of American Culture* (1977)、ニーナ・ベーム、*Woman's Fiction* (1978)、ジェイン・トムキンス、*Sensational Design* (1985)、デビッド・レノルズ、*Beneath the American Renaissance* (1988)などをはじめとする研究書が多く出ており、論文を加えると枚挙にいとまがない。だが、それらの研究では禁酒物語への目配りはまったくといって見られず、禁酒物語と家庭小説という二つのサブジャンルをつなぐという発想は見られない。女性禁酒物語作家に特化したキャロル・マッティングレイの*Well-Tempered Women* (1998)および、彼女が編纂した*Water Drops from Women Writers* (2001)は貴重な研究だが、今後は男女禁酒物語作家の対比研究が不可欠となる。本研究は、これまでの研究に抜け落ちていた視点から包括的な禁酒物語論の構築をめざすものである。

2. 研究の目的

19世紀アメリカで大量に発行された禁酒物語は、禁酒運動の重要な一環でありながら、同時期に多く書かれた家庭小説(domestic novels)の影に隠れてあまり注目されてこなかった。理由は、禁酒をめぐる言説が説教もしくはプロパガンダ色が強く、文学作品として評価に耐える作品が少ないことによる。また、元来、実体験の告白ナラティブであったはずが、いつしか脚色加わりフィクション化が進み、なかばエンターテインメントになったことも大きいだろう。禁酒体験談と禁酒小説の線引きはときに難しく、本研究では禁酒物語という用語を用いて、両者を包括的に取り扱いたい。

大量飲酒者は当時、「アルコール王」に拘束された奴隷という認識があり、1840年に始まった自助運動がワシントン運動として知られるのも、英国王の圧政から植民地を解放に導いたジョージ・ワシントンにちなんだことによる。また、女性解放論者にとって、女性に対する男性の不当な取り扱い、離婚の法的困難さゆえ酔っぱらいの亭主から逃れられず虐待され抑圧された妻のイメージでしばしば表現されたのである。

したがって上記三つの解放運動は相互に深く関連し、また担い手が女性であることが多く、活動家の顔ぶれも相互に関わっている。そうした状況をふまえ、本研究では、他の二つの解放運動を視野に入れながら禁酒物語に焦点を定め、解放のレトリックとイデオロギーの解明を行うことを目的とする。

また、最初に言及した家庭小説とのあいだに見られる興味深い共通性、すなわち、若い少女がときには自己犠牲の精神を発揮して影響力を父親に及ぼすプロットに注目し、19世紀アメリカの感傷主義の観点から、両者の共通点と、異なった展開へ至る差異の原因を考察する。禁酒物語の特徴のひとつに、男性作家の作品で離婚がモチーフになることはほとんどなく、メアリー・チェリスら女性作家の場合にわずかに見られるという点がある。本質的に家庭のドラマである禁酒物語において、なぜ離婚がテーマにならないのか、書き手の性差によるアプローチの違いにジェンダーの問題が関わってはいないだろうか。このような点を当時、エリザベス・スタントンら女性運動家が提起し始めていた離婚をめぐる論議に絡めて考察することで、禁酒物語のイデオロギーの特質と限界をジェンダーの視点から究明したい。

禁酒運動の一翼をになうプロパガンダとしての性格が強い禁酒物語であるが、一部の作品については文学作品として鑑賞に耐えるものがある。たとえば、T.S.アーサー、ハリエット・ストウの禁酒物語などについては、精密なテキスト分析を通じて作品論、作家論の観点から読みなおしを進めたい。その他の泡沫的作品群については、できるだけ多くの作品にあたり、俯瞰的に語りの特徴を抽出する。二つの異なったアプローチにより、立体的に禁酒物語論の構築をめざしたい。

スーザン・ウオーナー『広い、広い世界』(1850) やマリア・カミンズ『点灯夫』(1854)などに代表される家庭小説(domestic novels)はしばしば禁酒物語と類似のプロットを持つ。すなわち、幼い少女が父親をはじめ周囲の大人たちに(涙の感化力により)影響を及ぼすことで物語が大きく進展する。これには19世紀アメリカに顕著な感傷主義の影響がおおきく与っており、それを補助線に家庭小説と禁酒物語を架橋するという試みはこれまでほとんどなされておらず、大きな成果が見込まれる。また、共通のプロットを持ちながら、前者にあっては幸せな家庭構築で物語が終わるのに対し、後者では幸せな家庭が酒が原因で崩壊するところから物語が始まるという対称性が顕著である。この点に両ジャンルを分かち重要な特質が見出される。

禁酒物語のプロットを見ると、娘と息子の家庭内での役割の差があることに気づかされる。前者は、疑似近親相姦的關係のなかで、酔いどれの父親に悔悛を促す印象的な役回りが多いのに対し、後者は比較的影がうすいなか、ときには父親殺しに至る暴力性を秘めた反抗が特徴的だと言える。また、その扱いは作家の性差とも関係があり、それは、離婚をテーマに組みこんだ作品が男性禁酒物語作家についてはほとんど見られない反面、女性作家についてはときに見出されるという事実とも関係している。すなわち、禁酒物語のジェンダーの側面に禁酒物語のイデオロギー性が顕著に透視される印象が強い。本研究の問題意識はその点でもユニークと言える。

離婚問題をさらに発展させると、メアリー・チェリスなど、離婚を作品内で取り上げた作家のメッセージと、エリザベス・スタントンの離婚の議論の差異が問題となる。それは、女性解放運動を主導したスタントンとスーザン・アンソニーが、禁酒や離婚をめぐる対立するに至る経緯とも関わっており、その点の考察を進めることは、社会・家庭における女性の位置づけをめぐるドメスティック・イデオロギーを考究し、19世紀アメリカのジェンダー観、家庭観の見直しにつながる研究課題になるものと思われる。

3. 研究の方法

基礎的作業として資料収集を継続する。禁酒物語がもっとも隆盛した1840年代について言えば、たとえば*Letters from the Alms-House, or the Subject of Temperance* (1841), *The Price of a Glass of Brandy* (1841), *Incidents in the Life of George Haydock* (1847)などの重要作品を入手することを目標とする。手段としては古書市場、ネット検索、米国の知人を介しての購入、インターライブラリーの活用等あらゆる手段を用いるが、国内外の図書館へ出張して調査することも欠かせない。ハーバード大学英文科ニコラス・ワトソン教授、ペンシルバニア大学英文科デビッド・エスピー教授、ペンシルバニア州立大学人文学科サイモン・プロナー教授にはそれぞれの大学図書館所蔵の資料に関し教示を受け、資料調査の許可・招待を得ている。また、ニューヨーク市立図書館の禁酒物語コレクションも貴重な情報源である。

テキストの収集と並行して、入手した資料の分析も進めなければならない。その際、この分野の最新の動向を探るべく、指導的立場にあるアメリカの研究者、たとえば、アラバマ大学ジョン・クロウリー教授や、前述のエスピー、プロナー両教授らとは、引き続き情報交換したい。

分析の成果は口頭発表・論文の形で公表する。とくに、上記研究者らと共同し、権威あるMLA(アメリカ近代言語協会)年次大会で19世紀禁酒物語のセッションを組んでもらえるよう働きかけ、研究成果をアメリカ人研究者の前で披露するつもりである。また、以前、寄稿したことがあるジョン・ホブキンズ大学発行、American Studies Association 監修のオンライン版*Encyclopedia of American Studies*(アメリカ研究百科事典)に禁酒物語の項目記載を企画し、執筆する計画も立てている。

本研究は、研究担当者の年来の禁酒物語研究の発展形であり、これまでの成果を整理したうえで、新たな展開をめざすものとなる計画であって、最終的には禁酒物語に特化した単著の出版を目指している。禁酒物語の特質、語り口、構造、イデオロギーなど包括的に禁酒物語をとらえ、また、禁酒物語を生み出した19世紀アメリカの思想状況にも議論を拡げたい。

くわえて、これまで集めた禁酒物語テキストの文献目録を解題つきで完成させなければならない。この種の資料はわが国では珍しく、今後、他の研究者との共同利用ができるように資料の整理をすることが責務だと考えている。

4. 研究成果

19世紀アメリカ禁酒物語のテキストや関連する資料の調査・収集を継続的に行い、Mary Chellis, T.S.Arthur ら主要禁酒物語作家はもとより、Alice Carey, *The Adopted Daughter*

(1859), Nellie Graham, *The Glass of Wine* (1866)など、長らく入手困難な作品を調査できたことで、19世紀禁酒物語全般の理解が深まった。禁酒運動の重要部分をになった禁酒物語については、そもそも認知度が低く、理由は膨大なテキストが入手困難な状況にあることが大きい。そこで継続的にテキスト入手を行い、相当数のテキストを集めることができたことは、この分野の研究進展に大いに貢献するものと自負している。

それらの資料を基に男性禁酒物語作品における「男性性」の扱いを飲酒/禁酒という総反する観点から考察し、さらに同時代の女性禁酒物語作家の作品と比較することで、ジェンダー・ギャップのメカニズムの解明を行った。その際、男性作家と女性作家のジェンダー観、とりわけ離婚に関する考え方の違いに着目し、男性性、女性性の主題に見られるジェンダーギャップの解明を行ったが、時代思潮、とりわけ女性参政権運動内の見解の相違、例えばエリザベス・スタントンとスーザン・アンソニーの主張の相違などもふまえて考察できたことは、19世紀アメリカの社会運動の思想的見直しにつながるものである。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

森岡裕一「「解放」のディスクール ストウ文学と domesticity」関西外大『研究論集』第108号。2018年9月。査読有。pp.237-255。
<http://id.nii.ac.jp/1443/00007830/>

森岡裕一「Manliness のゆくえ 禁酒物語における自由意志」関西外大『研究論集』第105号。2017年3月。査読有。pp.21-35。
<http://id.nii.ac.jp/1443/00007721/>

[学会発表](計1件)

森岡裕一「アップ/ダウンの遠近法 イメージとしてのニューヨーク」阪大英文学会 第48回大会 特別講演。2015年10月。

[図書](計1件)

町田哲司監修『変容するアメリカの今』大阪教育図書。2016年3月。
(森岡裕一 第七章「アップ/ダウンの遠近法 イメージとしてのニューヨーク」pp.95-109 担当)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。